〈現代経営学全集〉

占部都美 責任編集

行動科学的意思決定論

吉原英樹 著

20

著者略歴

吉原英樹（よしはら ひでき）

昭和16年　大阪に生まれる.
昭和41年　神戸大学大学院経営学研究科修士課程修了.
神戸大学経済経営研究所国際経営部門助手を経て
現　在　同教授
主要著訳書　『新訳システムの科学』（サイモン著。共訳，ダイヤモンド社，昭和52年）『多国籍経営論』（白桃書房，昭和54年）『日本企業の多角化戦略—経営資源アプローチ—』（共著，日本経済新聞社，昭和56年）『中堅企業の海外進出』（東洋経済新報社，昭和59年）

行動科学的意思決定論　〈現代経営学全集〉第20巻

昭和44年9月26日　初版発行
昭和60年10月16日　2版発行

著者　吉原英樹
発行者　大矢順一郎
印刷者　堀内俊一

*　*　*

発行所　株式会社　白桃書房
101　東京都千代田区外神田5—1—15
電話(03)836-4781(代)振替東京0-20192

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。　堀内印刷／日進堂製本
ISBN4-561-16048-5 C3334　Printed in Japan

序　　文

今日の経営学を，たとえば10年前のそれと比較すると明らかになるように，経営学はこの数年のあいだにめざましい発展をとげた。このことは，だれもが認めるところであると思われる。ところで，経営学のこのめざましい発展をもたらした原動力の１つが，「行動科学的意思決定論」である。本書は，この行動科学的意思決定論を対象にして考察を試みたものである。

行動科学的意思決定論とはいかなるものであるか。

本書はこの問いに答えることを目標にしている。すなわち，行動科学的意思決定論は，意思決定の経済人モデルや伝統的組織論にたいして，どのような特色ある方法論のうえに展開されているか。また，それはどのような特色ある概念と仮説をもっているか。さらに，行動科学的意思決定論を特色づけている意思決定過程のコンピューター・シミュレーション・モデルとはいかなるものであるか。行動科学的意思決定論にかんするこのような問いに答えることが，本書の目標になっているのである。

この目標を達成するために本書でとられた方法は，行動科学的意思決定論を展開している代表的な文献を検討する方法である。筆者は，バーナード（C. I. Barnard），サイモン(H. A. Simon)，マーチ（J. G. March），サイヤート(R. M. Cyert）といった人たちの主要な著作を考察することによって，行動科学的意思決定論の生成と発展の過程を明らかにし，そのことをとおして上の問いに答えようとした。したがって，本書は行動科学的意思決定論についての学説史的研究であるといえる。

行動科学的意思決定論は，経営学の発展にたいしてどのような意義をもっているか。

この問いが，本書における考察の底に一貫して流れている問題意識である。筆者は，経営学の発展ということをつねに念頭におきながら，行動科学的意思

決定論の生成と発展の過程を明らかにしようと努めた。本書は，行動科学的意思決定論を経営学の立場からとりあげているのである。

筆者は，本書がその目標とするところを十分に達成していると考えているわけではない。当然とりあげるべきでありながらとりあげなかった問題も，いくつかあると思われる。また，思わぬところで大きな誤りをおかしているかもしれない。これらの点については，今後の研究によって正していきたいと考えている。

たとえば，行動科学的意思決定論の生成と発展の過程を，現実の企業経営の諸問題と関連させて究明することは，本書ではほとんど行なわれていない。行動科学的意思決定論は，その一面では，伝統的な理論では解決できない現実の企業経営上の諸問題にたいして実践的に答えるという意味をもっている。本書では，この面はほとんど考察の対象から除外されている。この点で，本書における学説史的研究は，完全なものではない。この面の考察が，今後の課題として残されているのである。

本書は，筆者の研究にとって1つの出発点である。筆者は，これからもいっそう研究に精進することによって，新しい経営学の確立に貢献したいと考えている。今後とも，諸先生方ならびに同学の方々のご指導を心からお願い申しあげるしだいである。

未熟な著作ではあるが，本書がとにかくこのようなかたちでまがりなりにも出版されるようになったのは，多くの方々のご指導とご支援のおかげである。つぎにそのおもな方々を記して，感謝のしるしとしたい。

まず，学生時代から今日にいたるまでずっとご指導をたまわってきている占部都美先生（神戸大学経営学部教授）に，この機会にあらためてお礼を申しあげたい。筆者がこのような書物を公刊できるようになったのは，なによりも先生のご指導のおかげであるといわなければならない。

筆者が勤務している神戸大学経済経営研究所の先生方ならびに職員の方々には，筆者に十分な研究時間と研究上の便宜を与えられたことにたいして，深く感謝の意を表したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

筆者は，また，神戸大学経営学部の諸先生方ならびに学外の諸先生方から，つねにご指導とご支援をたまわっている。この機会に厚くお礼を申しあげたい。

以上の方々のほか，筆者の研究生活をささえて下さっている多くの方々にお礼を申しあげなければならない。とくに，占部都美先生を指導教官とする大学院のゼミナールの諸氏，先輩ならびに友人，さらに両親ならびに妻に，この機会にお礼を申しあげたい。

最後に，筆者のような若輩の未熟な研究の出版を快く引き受けて下さった白桃書房に，とくに大矢順一郎氏と照井規夫氏に，厚く謝意を表したい。

昭和44年8月25日

吉　原　英　樹

目　　次

第1章　経営学と行動科学的意思決定論 …… 3
1.　行動科学的意思決定論の意義…… 3
2.　行動科学と行動科学的アプローチ…… 5
第2章　行動科学的意思決定論の源流 …… 11
第1節　組織の意思決定過程 …… 11
第2節　バーナードと行動科学的意思決定論 …… 15
第3節　バーナード理論の限界 …… 21
第4節　む す び …… 22
第3章　意思決定の合理性と組織影響力 …… 25
第1節　は じ め に …… 25
第2節　伝統理論への挑戦 …… 26
1.　管理原則論への挑戦…… 26
2.　意思決定の経済人モデルへの挑戦…… 29
第3節　意思決定の心理学的モデル …… 32
第4節　組織影響力の理論 …… 37
1.　組織における人間行動の分析フレームワーク…… 37
2.　組織影響力のメカニズムと機能…… 41
第5節　『管理行動論』の限界 …… 46
第6節　む す び …… 48
第4章　意思決定の行動科学的モデル …… 51
第1節　意思決定のモデル …… 51
第2節　制約された合理性の原理 …… 55

第3節　行動科学的な決定ルール …… 56
(1) 単純な利得関数 …… 56
(2) 逐次的な情報収集 …… 57
第4節　意思決定過程のダイナミックス …… 60
1. 解の一意的な存在 …… 60
2. 意思決定過程の適応 …… 63
第5節　行動科学的モデルと満足基準 …… 66
第5章　人間行動の適応的モデル …… 69
第1節　『組織論』と行動科学的意思決定論 …… 69
第2節　意思決定の適応的モデル …… 71
第6章　プログラムと定型的意思決定 …… 79
第1節　意思決定の2つのタイプ …… 79
第2節　プログラムの概念 …… 83
第3節　意思決定の定型化 …… 87
第4節　プログラムと組織の適応過程 …… 90
第7章　探求と革新的意思決定 …… 93
第1節　革新の概念 …… 93
第2節　探求と革新の契機 …… 97
1. 不満足の発生 …… 97
2. 探求と革新の制度化 …… 99
3. 計画のグレシャムの法則 …… 100
第3節　探求と革新の過程 …… 103
1. 問題解決行動の一般的特色 …… 103
2. 探求の過程 …… 105
3. プログラム開発のための分析手法 …… 107
第4節　組織構造と革新的意思決定 …… 108
(1) 革新と組織形態 …… 109

(2) 革新と権限……110
(3) 革新とコミュニケーション……110
第5節　問題志向的革新とスラック革新……112
第6節　プログラムの革新……118
第8章　近代組織論から「企業の行動理論」へ……125
第1節　近代組織論……125
第2節　企業理論と組織論の接合……127
第3節　「企業の行動理論」の生成……136
第9章　「企業の行動理論」の方法論と基本概念……141
第1節　「企業の行動理論」の研究戦略……141
第2節　企業の組織的目的論……144
1. 企業目的の基本的性格……144
2. 企業目的の形成過程……146
(1) 交渉による企業目的の形成……146
(2) 経営目的と内部統制システム……149
(3) 経営目的の適応……150
3. 多元的な経営目的と意思決定……152
(1) 多元的な経営目的……152
(2) 目的間の衝突の準解決……154
4. 若干の批判的検討……156
第3節　企業の組織的期待論……162
1. 企業の意思決定と情報……162
2. 問題志向的探求……163
3. 不確実性の回避……166
4. 若干の批判的検討……169
第4節　企業の組織的選択論……171
1. 適応的システムとしての企業……171

2. 企業の意思決定ルール……174
3. 若干の批判的検討……176
第5節 組織的意思決定の基本構造……179
第10章 企業の行動科学的モデル……183
第1節 理論の検証……183
第2節 モデルの基本構造……189
第3節 企業の意思決定過程のコンピューター・シミュレーション・モデル……191
1. 生産量決定のモデル……191
2. 価格決定のモデル……193
3. 販売戦略決定のモデル……197
第11章 企業行動科学の展開……201
第1節 「企業の行動理論」の限界……201
第2節 企業行動科学の成立……206
第12章 投資決定の行動科学的モデル……211
第1節 投資決定の経済人モデル……211
第2節 ライト・モデルの意図……215
第3節 多元的な投資決定基準……218
1. 投資決定担当者の欲求と投資決定基準……218
2. 若干の私見……224
第4節 予測と不確実性……228
第5節 投資決定の確実性モデル……233
第6節 投資決定の不確実性モデル……240
第7節 む す び……246
第13章 む す び……251
主要参考文献……263

事 項 索 引……273
人 名 索 引

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

行動科学的意思決定論

第1章

経営学と行動科学的意思決定論

1. 行動科学的意思決定論の意義

「行動科学的意思決定論」とはいかなるものであるか。また，それは経営学の発展にたいしてどのような意義をもっているか。行動科学的意思決定論を展開している代表的な文献に体系的な考察を加えることによって，行動科学的意思決定論の生成と発展の過程を明らかにし，そして，そのことをとおして上の問いに答えたい。これが，本書にこめられたわれわれの念願である。

さて，経営学はいま大きくゆれ動いている。経営学は，現在，1つの大きな革命期の状態を経験しているといえるのである。

今日，経営学の研究対象は経営管理のあらゆる領域におよんでいる。また，そこでとられている立場や方法論も多種多様である。まず，科学的管理法，人間関係論，管理原則論などの伝統的管理論がみられる。つぎに，経営における意思決定問題に数量的分析の方法で接近するオペレーションズ・リサーチやマネジメント・サイエンスなどの規範的意思決定論がはなばなしい展開をみせている。さらに，行動科学的な概念と仮説を用いて，またコンピューター・シミュレーションの方法を用いて，組織における意思決定の過程を解明しようとする行動科学的意思決定論が展開されるようになっている。

今日の経営学は，このように百花撩乱の状態を呈しているのである。

経営学のこのような状態は，伝統的な立場に立つ人たちにとっては，たしかに混乱や方向喪失の状態以外のなにものでもないであろう。なんとなれば，伝統的管理論の方法論とは異質な，あるいはそれを真正面から否定するような方

法論にもとづいて，各種の新しい研究がつぎつぎと展開されているからである。

たとえば，伝統論の立場を現在において代表していると考えられるクーンツ(H. Koontz) は，この状態を管理論における「ジャングル戦」と呼んでいる。かれはつぎのようにのべている。「しかし，経営管理者，そして実際には，進歩した経営管理から生ずる偉大な潜在的社会的利益を理解しているすべての人たちを当惑させているものは，まさに，経営管理論へのさまざまなアプローチがある種の混乱した破壊的なジャングル戦へと導いているということなのである。」[(1)] そしてかれは，伝統的管理論とくに管理原則論の立場に立って，この「ジャングル戦」を生じた原因を究明し，そのうえでそれを解決する方法を提示している。そこには，経営学の現状にたいする伝統論の立場からの認識と，それにたいする対処のしかたとが，示されているのである。[(2)]

しかし，われわれは，経営学の現在の状態をクーンツのように混乱した破壊的な「ジャングル戦」とみることには，反対である。また，伝統論の立場から経営学の現状を整序することにも，反対である。われわれは，一見したところでは混乱とみえる経営学の現状のなかに，いままでの伝統的な経営学にかわる新しい明日の経営学を生み出す基盤ができつつあることに注目するものである。われわれのみるところでは，経営学の現状は，混乱した破壊的な「ジャングル戦」でもなければ，また方向喪失の状態でもない。現在は，いままでの伝統的な経営学とはちがう新しい経営学が生まれようとしている経営学の「革新」の時期なのである。そして，重要なことは，この経営学の革新にさいして行動科学的意思決定論が1つの中心的な役割を演じているということである。

現実の企業行動を科学的に説明することができ，また，企業の直面するさまざまの問題を解決するための分析用具や手法を提供することのできる新しい経営学を建設するためには，われわれは，伝統的な経営学にみられるいくつかの基本的な限界を克服しなければならない。行動科学的意思決定論は，伝統的経営学の限界を克服して新しい経営学を確立することをめざす1つの，そしてもっとも強力で有望な1つの試みである。われわれはこのようにみるのである。

明日の新しい経営学において1つの中心となるものは，行動科学的意思決定

論を中核的な部分として成立する経営学である。真実の意味で科学の名に値する経営学の出現は，行動科学的意思決定論を中核部分とする経営学が成立するようになったときにはじめて期待できるといっても過言ではない。これが，われわれの信条である。本章の冒頭に明らかにしたわれわれの念願は，われわれのこのような信条から出ているのである。

われわれは以上において，行動科学的意思決定論が新しい経営学の建設にさいして中心的な役割を演じるというわれわれの信条を明らかにした。それでは，われわれのいう行動科学的意思決定論とはいかなるものであろうか。この問いにたいする本格的な解答は，第2章以下でくわしく展開することになっている。ただ，われわれはここで，第2章以下の考察を行ないやすくするために，行動科学的意思決定論についておおよその見当をつけるのに必要なことを明らかにすることにしたい。

2.　行動科学と行動科学的アプローチ

われわれは，まず，「行動科学」あるいは「行動科学的」ということについて，少し説明しておかなければならない。

最近，わが国においても各方面で「行動科学」という名称がよく使われている。また，経営学の分野においても，行動科学的とか行動科学的アプローチといったことがよくいわれるようになっている。

それでは，行動科学とはいかなるものであるか。それは，従来の社会科学や自然科学とどのような関係にあるか。また，経営学における行動科学的アプローチとはどういうものであるか。

行動科学という名称が一種の流行語になっているにもかかわらず，このような問いに正確に答えることは，現在ではまず不可能であるといえる。その理由は，第1に，行動科学の発生の地であるアメリカにおいても，行動科学という名称が実に多義的に使われてきているからである。第2の，そして，より基本的な理由は，行動科学はすでに確立しているのではなくて，それは現在においてめざましい展開をみせつつあり，そのために刻々と変化しつつあるからであ

る。したがって，ここでは，さきほどの問いにたいしては暫定的にしか答えることができないのである。

われわれは，行動科学とは，ごく一般的には，人間行動にかんする一般的な実証理論の開発をめざす新しい学問上の動きとして理解することができると考える。たとえば，哲学者である吉村融氏は，行動科学にかんしてつぎのようにのべておられる。「これらの新局面の出現は，一言にしていうならば，人間・社会諸科学の領域における科学革命ないしは現代化革命といったらよいものであり，その変革の重要ないくつかの局面を指して“行動科学”という名称が用いられるわけである。[3]」しかし，このような一般的な定義だけでは，行動科学とはいかなるものであるかを明らかにするためには不十分であろう。行動科学を明らかにするためには，さらに，行動科学が備えているいくつかの顕著な特徴をみていくことが必要であると思われる。

行動科学を特色づけている一連の特徴をまとめてみると，それはつぎのようになると思われる。[4]

(1)　人間行動――行動科学は，その名称から想像されるように，人間行動を研究対象にしている。物理科学が非生命現象である物理現象を研究対象とし，また生物科学が生命現象を研究対象としているのにたいして，行動科学は人間の行動を研究対象にしているのである。

(2)　科学的方法――行動科学は，人間行動を研究するにあたって，自然科学の分野で確立されたと考えられる科学的方法を用いる。科学的方法という点では，行動科学と自然科学のあいだに基本的な相違はないと考えられている。

(3)　学際的アプローチ――行動科学は，人間行動を研究するにあたって，既存の学問間の境界線にこだわらない。それは，人間行動を解明するために，社会学，心理学，経済学，文化人類学などの関連諸科学を総動員する。つまり，それは，人間行動にたいして「学際的アプローチ」(interdisciplinary approach）をとるのである。

(4)　統一理論――行動科学は，人間行動にかんする統一的な一般理論の開発

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com